

中国地主経済封建制度論綱（Ⅲ）

王 亜 南 著
 奥 田 秋 夫 監訳
 片 岡 幸 雄 訳

目 次

- 一 序論 封建制の基礎としての領主経済と地主経済
- 二 中国地主経済の封建形態形成とその変遷
- 三 地主経済と中央集権的官僚政治
- 四 地主経済と天道観念の政治思想
- 五 地主経済と民族発生の問題
- 六 地主経済と中国社会の長期停滞の問題（以上前号まで）
- 七 「アジア的生産様式」と地主経済形態におけるその歴史的展開
（本号）
- 八 西周における領主経済封建社会の形成と地主経済封建社会に受け継がれた「アジア的生産様式」の諸特徴（次号以降）

七 「アジア的生産様式」と地主経済形態 におけるその歴史的展開

これまでに述べてきた第三、第四、第五、第六の各章は、地主経済を基礎として中国封建政治の中央集権的形態が生まれ、儒家のイデオロギーが発展してきて、近代的意味におけるのとはちがった大民族集団の思想が形成されてきた事情を説明してきたのである。またさらに、これら内在的諸

要因の作用によって、中国社会の長期停滞的現象がもたらされた事情についても説明してきた。本章と以下の西周社会の性質にかんする一章においては、「アジア的生産様式」と西周封建社会が、中国封建地主経済の形成に対して、究極的にどのような直接・間接の影響を与えてきたかを、個別に研究していきたい。

「アジア的生産様式」と西周社会の性質にかんしては、今日までわが史学界にあっては、極端に異なった見解が存在する。従って、本稿の議論の枠組みとしても、「アジア的生産様式」の構造と変遷が、西周の領主封建制度乃至は領主封建制から地主封建制に移行していくのに、何らかの制約作用を及ぼしたのは確かだということ、この点を指摘しようとするに止まる。とはいえ、この2つの生産様式の性格に関連する問題を分けずに、われわれが現にもっている認識的基礎の上に立ってそのうえにさらに説明を加えていくというのは、依拠すべき前提としては明らかに不十分だということになる。

「アジア的生産様式」にかんする問題については、中国の大革命からさほどたない時期、ソ連の史学界でかつて極端に意見の分かれた論争が起こり、その後もさらに続々と異なった見解が発表されてきた。この中には、方法論にかんする2つの相対立する意見があった。1つはコキン、マジャー、コーデスなどの見解で、この見解は「アジア的生産様式」を特殊東洋的形態とみなし、世界史的範疇から逸脱した特殊的发展であるとみなす。これは明らかに、プレハーノフの地理的唯物論の影響の産物である。プレハーノフの見方によれば、東洋の「アジア的生産様式」、ギリシャ・ローマの古代生産様式、ゲルマンの封建的生産様式というのは、関連する各民族の地理的条件が異なっているために出てきたのであって、並存するものだというわけである。彼は、マルクスの提起した「アジア的、古代的、封建的、さらに現代ブルジョア的生産様式」という、縦の発展順序を、横の関連として理解したのである。コキンの解釈はこれとは異なっている。コキンは、「アジア的生産様式」は氏族社会が崩壊して以後封建社会が形成

される前までの一段階と考えた。またマジヤールは、東洋の封建制度もこの段階に包括する。しかし彼等は共に、「アジア的生産様式」は東洋社会の発展過程における一特殊段階と考える。

今一つはコヴァレフ（柯瓦列夫）、ライハルト、ラモエフ（拉莫耶夫）などの見解である。この見解は、「アジア的生産様式」は何も特殊なものではなく、一般的な社会発展過程の例外的形態ではない、と明確に述べる。これはどうみても、一般的な発展過程で顕われる特殊形態にすぎないというのである。彼等は概ね、「アジア的生産様式」を未発達（1）の段階から出てくる奴隷制という点から説くのである。いわゆる「アジア的」という特殊な意味内容は、育ってない人を正常な人と対比して示すようなものにすぎない、というわけである。

突き詰めて考えてみると、この相対立する2つの見解には共通する点がある。すなわち彼等は、マルクスのいうところの「アジア的生産様式」は、原始共産社会が崩壊してから以後の産物だ、といずれも考えるわけである。筆者はつい先頃まで、異なった見解をもっていた。

1935年出版した拙編「中国社会経済史綱」⁽¹⁾における、「中国社会経済史における方法論上の問題」という一章で、筆者は特に「アジア的生産様式」というこの問題に対して概括的説明を行った。その結論は次のようなものであった。「この4つのもの一すなわち、上文の〈アジア的、古代的、封建的、そして現代ブルジョア的生産様式〉を指すわけであるが一を継起的なものとして容認するという前提の認識に立てば、いわゆるアジア的生産様式というのは、一般的には原始共産社会の生産様式を指しているということ（2）は明らかである。原著者（すなわちマルクス……括弧内訳者）が他の著述の中で具体的に論及している、アジア、中国、インドなどの諸国の社会経済状態が、ここで言うところの〈アジア的〉云々ということに当たるのであって、これは並列的にもちだして論じられたものとは言えない」。

1952年筆者は山東大学において、「政治経済学と一般科学との関係」と

(1) 王漁邨のペンネームで生活書店より発行

題する題目で、報告を行ったことがある。この中で筆者は歴史科学の生成について触れ、マルクスが歴史区分として、アジア的、古代的、封建的、現代ブルジョア的という4つの段階に区分したということについて論じた。そして、原始共産社会に対してマルクスは、当時、その末期にあるインド型の〈共同社会〉を見出しすぎていなかった。したがって、「アジア的生産様式」というこの言葉をいささかも出しはしたものの、汎世界的形態のものとして全面的にこれを明確に取り上げてきたのではなかったのである。マルクスがすでに入手できる材料に基づいて法則を求め、結論を引き出したことは、作業としては極めて周到で精確なことであり、また極めて科学的であったといえる。

エンゲルスは、マルクスと比べて年代的にやゝおくれて、マルクスが「経済学批判」の序言を発表するほど前後に、ロシア、ドイツ、アメリカなどについて、各々別々に原始共産社会の関連資料を発見して、原始共産社会から奴隷社会に移行していくのは通世界的現象だということを、極めて明瞭に証明した。これによってエンゲルスは、彼の「家族、私有財産および国家の起源」の中で、次のように表明した。1877年モルガンが「古代社会」を出して以降、古代社会の謎、すなわち古代社会の前身の謎を解く鍵が与えられた。要するに、奴隷社会以前にやはり原始共産社会があった⁽²⁾ということなのである。

筆者がずっと「アジア的生産様式」を原始共産社会として解釈してきたのは、以下の3つの認識に基づく。

第1に、マルクス、エンゲルスが原始共産社会の積極的主張者であったこと。マルクスは1859年「経済学批判」の序言で歴史の段階区分を与えたとき、当然ながらその時点で探しあてられるだけの材料をまとめてたうえ

(2) 「文史哲」、1952年、第6期、17頁参照——エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」の中で述べられているこの種の見解、「共産党宣言」におけるブルジョアジーとプロレタリアートにかんする節の説明の中では、さらに詳細な説明がなされている。

で、これが革命の実践と理論とくに重要な意味をもつ順番に階梯的に列挙していったのである。

第2に、「経済学批判」序言の中の関連文言部分が、以下のようになっていること。「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示される」。「アジア的」というのを「古代的」というのの前におくのは、要するに「経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示される」ということであって、このことは、アジア的生産様式が原始社会のことを指しているということ、極めて明確に説明するものではあるまいか。

第3に、「アジア的生産様式」を原始社会が崩壊した後に出てくる奴隷制とみなす論者達は、すべて、マルクスがその他の文献の中でも広範にわたって取り上げている近代以前のアジア的形態に対して、合理的かつ矛盾なき分析をなしえていないということ、これである。従って、マルクスの生産様式にかんする一般的な歴史区分と、彼がアジア的形態を商業、貨幣および土地所有などの具体的歴史形態をあらわすものとして出したということと区別して考えたほうが、比較的わかりのいい話ということになるように思われる。

しかし、筆者は昨年「文史哲」誌上で日知並びに童書業両先生の「アジア的生産様式」にかんする論争に接するに及んで以後（筆者は童先生の「文史哲」第1巻第4期のアジア的生産様式についての論文をまだ読んでいない）、特にベルリンの新しい版のマルクス、エンゲルスの文献を手に入れて、関連文言を比較対照して検討した後はじめて、筆者の往年の推論が、原著者の全く誤解の上に立つものであり、これは自分で検討しなければならぬと感じるようになった。

「アジア的」(Asiatische) 生産様式というのは、原始社会とか、封建社会を指すものではなく、奴隷制の段階を指すのである。エンゲルスは晩年の著作の中で、明白に次のようにのべている。「アジアの古代および古典古代においては、階級抑圧の支配的形態は奴隷制、すなわち大衆から土地

を収奪することよりも、むしろ彼らのからだを領有することであった⁽³⁾。筆者はエンゲルスのこの指摘に基づいて、再度詳細に、マルクスが他の所で論じている関連語句を解釈してみて、確かに自分のもとの考え方が間違っているという認識に達した。

マルクスは1857～58年に著わした「経済学批判」の草稿の資本主義以前の生産形態のうち、そこでとりあげた3つの財産形態の第一形態のものを、「アジアの生産様式」の基礎とみなした。また、マルクスは「資本論」第Ⅲ巻の中でつぎのようにのべている。「以前の見解がアジアや古代や中世の商業の規模と意義とを過小評価していたのとは反対に、それを非常に過大評価することがはやってきた⁽⁴⁾」。ここでいっている「アジア的」ということの規模と意義は、明らかに階級分裂が生ずる以前の状況とは解釈できない。従って、「経済学批判」序言の順序に従って、「アジア的」を「古代的」、「中世的」あるいは「封建的」の前におくとしても、明らかに「アジア的」生産様式は奴隷社会以後の段階とは解釈できなくなる。

これに留まらず、マルクスはまた他の所でも、「アジア的」というこの言葉の前に「古代」という語を付している。例えば、つぎのように言っている。「古代アジア的 (altasiatis che) とか古代的 (antike) などの生産様式では、生産物の商品への転化、したがってまた人間の商品生産者としての定在は、一つの従属的な役割を演じている（括弧内は王亜南の挿入、邦訳にはない……訳者⁽⁵⁾）。このことは、「古代アジア的」および「古代的」というのは奴隷社会について論じていると同時に、アジア的古代とギリシャ・ローマ的「古典古代」というのが、同一の段階の社会の異なった発展の時代であることをも暗に示唆している。つまり、アジア的古代というのは、奴隷社会の未発達で未成熟な状態を単に表わすにすぎないのである。これ

(3) エンゲルス「[[イギリスにおける労働者階級の状態]]の1887年アメリカ版への」序文, マルクス=エンゲルス全集, 第2巻, 大月書店, 1966年, 659頁。

(4) マルクス「資本論」, 同上全集, 第25巻, 第1分冊, 大月書店, 1968年, 416頁注50。

(5) マルクス「資本論」, 同上全集, 第1巻, 第1分冊, 大月書店, 1974年, 106頁。

はエンゲルスの先の言葉と完全に一致するだけでなく、また、「経済学批判」の序言における「経済的社会構成のあいつぐ諸時期」にまつわる疑惑をも解明しうる。当時（「経済学批判」の序言を書いた1859年）マルクスが、奴隷社会以前の原始共産生産様式のことを取り上げていなかったということについては、エンゲルスの「家族、私有財産および国家の起源」における関連文言および前に引用した「共産党宣言」の附注によって、マルクスがまだ当時史実によっては十分に実証されていなかったこの生産様式に対して、なお極めて慎重な留保的態度をとっていたということが、いっそう明らかになってくる。

つまり、マルクスはアジア的生产様式を未発達な奴隷制として取り扱ったのである。このことは、マルクス自身の、特にエンゲルスの晩年の文献の中で、非常にはっきりと示されている。この点について言えば、もともと私と同一の見解をもたれていた童書業先生は、自分が作者がもともと意図した考え方を誤解していたということを、改めて考えられる必要がある。

しかし、「アジア的生产様式」は未発達な奴隷制度を指すと明確に結論づけたとしても、それは「アジア的生产様式」問題の討論にとりかかる第一歩であるにすぎない。従って、われわれがここで注意すべきは、このような生産様式を確定するにあたって、究極的にどういった特徴が含まれているか、なぜ古典的奴隷制にさらに発展しなかったのか、このことが西周社会の性格にどのような影響を与えたか、この何らかの要素が地主経済の封建制の形成に役立ったか、マルクス、エンゲルスがその他の所で述べたのは、奴隷制段階のアジア的基礎と、貨幣、商業、高利貸形態を指したのではなかったのか等々、どのようにして中国の史実と結びつけて説明したらよいのか、これらの問題はすべて、「アジア的生产様式」を未発達な奴隷制と明確に結論づけた内外の史学家達によっても、今日なお十分満足のいく解答が与えられていないということである。しかし、これは確かに中国社会史研究上の大問題である。明らかに、筆者はこれらの問題に解答を与えるような能力はもっていないが、地主経済封建制度を考えていくとい

う角度から、若干の不十分な見方を提起してみたいと思う。

全体的には、アジア的ということによって、あるいは範囲を狭めて、中国奴隷制の未発達な形態自身もつ特徴といったもののために、それは古典的形態への発展が制約されたということである。そしてまたこのことは、周代の初期封建制およびその後の地主形態への転化に影響を与え、そのことによってまた、中国社会が長期停滞をするという癌をつくり上げたのである。以下筆者は、中国の史実をつなぎ合わせ、マルクス、エンゲルスの関連文献および史的唯物論の原理をつないで説明してみたいと思う。

ここで先ず「アジア的生産様式」の基本的特徴を考察するにあたって、マルクス主義は、いかなる社会の生産様式もその財産の所有形態を基礎とするということを、われわれに教えている。従って、資本主義以前の社会にあつては、土地という生産手段の様々な占有形式が、各々異なった性格をもつその生産様式を決定する。「アジア的古典古代」というのは、エンゲルスが指摘したように、「大衆の土地を剝奪するというだけでなく、彼等の人身をも占有する」ということなのであるが、しかしアジア的古代の土地というのは共同体とか、氏族、大氏族とか、集団形態を通じて占有されていて、これら集団の構成メンバーは、剰余労働生産物を貢納形式によって、最高統一の首長あるいは専制君主に献じたということである。そこで、この生産様式は以下のような諸特徴を顕わしている⁽⁶⁾。

- (1) 程度においてさまざまに差異はあるが、自然に発生して成長してくる、家族を紐帯とする集団、例えば、氏族集落あるいはその連合体が、土地所有制の主要な前提となる。
- (2) 集落あるいは共同体の財産は実際には存在するが、これらの一部あるいは大部分の土地の剰余労働生産物は、統一の首長あるいは君主に貢納されなければならない。このことによって、土地財産権は彼らに付与されるところとなり、実質は占有あるいは使用の権利をもつというにすぎない。

(6) マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』参照。

- (3) 個々の個人は集落あるいは共同体のメンバーとして存在しており、労働の条件である自然とか土地には集落あるいは共同体を通じて対峙し、占有あるいは占用する権利をもつにすぎない。すなわち、形式的には土地財産権は、個々のメンバーにとっては間接的というわけである。
- (4) 共同体あるいは集落は手工業と農業が結びつけられて形成されていることから、また、それ自体再生産、拡大再生産の条件を含んでいることから、これは完全に独立して存在し、かつ存続しつづけることができる。かくてこれは、統一体の君主あるいは王の専制主義の現実的基礎を構成する。
- (5) 1人の君主あるいは王は統一体のさまざまな集団、例えば集落とか大氏族とか等々の集落では、大体どこでもこれらメンバーのために、争い事をおさめる君主あるいは王として、直接関連する代表人物あるいは首長が発生するということになることから、これら組織ではかなり専制的なものも出てくるし、比較的民主的なものも出てくる。したがってそれは、その内部を構成する分子がどうかを見るとか、あるいはそれが原始社会の民主的形式に比べてどの程度崩れてきたかを見てもなくてはなるまい。

マジヤールはかつて、マルクスが「資本主義的生産に先行する諸形態」の經典的著作の中で提示した、上述の「アジア的生産様式」の諸特徴点を、以下の4項目にまとめてつぎのように説明した。すなわち、「土地国有一非私有、農村共同体、国家形態で表われる専制政治などにはさらに、人工的な灌漑およびこれに伴って生ずる大規模公共事業組織の必要性も加えられている」⁽⁷⁾が、これは極めて不穩当である。これは、アジア的古代と古代の「アジア的生産様式」の残余を一緒くたにするというだけでなく、「アジア的生産様式」自体と、マルクスが「アジア的生産様式」の形成の原因と考えたものとも、一緒くたにしている。われわれは、当時の土地所有

(7) 王漁邨編『中国社会經濟史綱』、16頁参照。

形態が果たして「国有」だったと言えるであろうか。われわれは、治水およびこれに対応した公共事業の「必要性」を、生産様式の特徴の一つとみなすことができるであろうか。

実際には、「アジア的生産様式」の特徴、あるいは上に挙げてきたような諸特徴は、一方で、これがすでに原始社会の共有形態を維持できなくなり、搾取者と被搾取者を生み、搾取者が被搾取者を強制するところの国家機構を生ぜしめたことを表わしている。またこのことは同時に、これが古典的な奴隷社会のようなところまで、階級対立が進まなかったということをも物語っている。血族的な紐帯がやはり社会組織と隷属関係の有力な基礎となっており、社会組織内部とその統一体に対する君主は、またある程度民主的でもあり、自由も保証していた。土地、財産に対する私有権は存在しなかった。集団による占有が受け継がれるか、あるいは慣習となっていた。国王の所有形式も、貢納という一部の土地剰余生産物ということによって実現されるというにすぎなかった。土地剰余生産物を提供するのは、決して全面的に土地を利用するというにだけあるというわけではなく、また集団としての統一体に対する臣服とか、敬虔従順の意を表する意味ももっている。「普く天之下に王土に非ざる莫く、率べて土の濱に王臣に非ざる莫し」といった類の言葉は、丁度こういった意味の含意を表わしている。

かくて、この段階の直接生産者、農民あるいは牧畜に携わっている者が奴隷化されたのは、少数の人とか政治支配者が、彼等の剰余労働に寄生していたからだといえよう。これらの農民や牧畜に携わっている者は、集団の内部で支配者に対してある程度民主的な面をもっていたし、ある程度自由をもっていたといえる。こういった状況は、こういった奴隷制度が全社会の圧倒的多数の農場、牧場、手工業工場、鉱山、さらには売買の行われる場所とかで、主人が鞭と鎖で労働者を非人間的労働に強制するというようなところまでは発展しなかったためである。

中国における伏羲、神農、黄帝、堯、舜および夏の禹などの関連の時代は、

伝説の段階に属するけれども、一方で史実によっても、こういったことが、社会史上未開時代の下期から野蛮の段階にかけてさまざまな発明者が出てくる可能性があるということと、順序としては大体符合する。夏の時代、特に商の時代になると、すでに文明の時代領域に入ったことは歴然としているが、厳密な意味での（その後の変化した形態と区別された）「アジア的生産様式」が出てくるのは、丁度この時期のことである。

虞書、夏書、商書などの記載の中で暗に示されている当時の生産関係によると、特に直接生産者の社会的地位については、彼等は剰余労働生産物の提供者、すなわち被搾取者であったということは明らかに示されているが、個別的な奴隷主とその奴隷の関係についての形跡は示されていない。唯せいぜい繰り返し述べられている「九族」とか「百姓」といったことで示唆されるような、族姓の奴隷の痕跡があるのみである。取り上げられている「民」、「兆民」、「蒸民」、「黎民」……というような場合、民と国と君主とは対称の形に取り扱われている。例えば、いわゆる「天聰明なれば、自ずから我民聰明なり。天の畏れるを明らかにすれば、自ずから我民の威を明らかにするなり」（虞書皋陶謨）とか、「皇祖に訓有り、民は近かる可し、下におくべからず、民は惟れ邦の本なり、本固まれば邦寧らかなり」（夏書五子之歌）、「后民に非ざれば使うに罔く、民后に非ざれば事うるに罔し」（商書咸有一徳）……こういったことなどは、当然「民」のことを重視していることを示し、彼等が「田に服し、穡に力す」（商書盤庚）というのは、もしも君主あるいは王が指導、監督、強制しなければ、「農を惰し、自らを安んじて、作勞に昏からずといえども、田畝に服せざれば、其を越えて黍稷の有ること罔し」（商書盤庚）ということであり、このことは一方で「后民に非ざれば使うに罔し」ということであり、他面「民后に非ざれば事うるに罔し」ということである。

集落あるいは農村共同体の基礎の上に打ち立てられた専制主義には、最初の形態では明らかに、前の社会の原始的な自由と民主的要素をのこすような余地もあった。このことがまた、未発達な奴隷制段階の直接生産が、

なぜ「自由民」のような様相を具えたものとみなされるかの基本的な原因である。

明確にしておかなければならないが、私はここで、このような生産様式にバラ色を塗りつけて、これが「愛すべきものだ」と言おうとしているのではない。そうではなく、これは原始社会の形態から完全に離脱、分化し切っていないからこそ、このようないくつかの特徴をもっているのだ、まさにこのことの単なる表われにすぎない、こういう捉え方をしているのである。

さて今や、なぜこのような生産様式が形成され、これがなぜ古典的な奴隷制にまで発展しなかったのかの原因について、論じなければなるまい。

一般に社会史上の文明段階は、奴隷の搾取形態をもってはじまる。しかし、各々の社会はそれなりの歴史転化の具体的条件が異なっていることから、奴隷の搾取形態にも明らかに多くの差異があらわれる。未発達な奴隷的形態とみなされる、いわゆるアジア的生产様式は、このような意味において提起されたものである。しかしながら、一つの社会的生産様式としてみると、すべからず基本的生産手段—土地占有(こういった占有がどのような形式をとろうとも)を通じて、直接生産者の剰余労働を搾取するということ、これに帰着する。アジア的専制主義の基礎は孤立した自給自足の、一定の血縁的関連をもつ農村共同体組織だということは、すでに周知のことである。これらの組織の土地、財産に対する集団所有権は、「普く天之下に王土に非ざる莫し」という代理管理権(代官)として表わされるのである。

では、これらの集団組織はなぜ専制君主を戴くのか。マルクスは、「資本主義的生产に先行する諸形態」の著作の中で、つぎのように言っている。「労働により現実に領有することの共同体的諸条件、すなわちアジアの諸民族のばあいにきわめて重要であった用水路、交通手段等は、このばあいには上位の統一体、すなわち小さな諸共同体のうえにかぶ専制政府の事

業として現れる⁽⁸⁾」。エンゲルスはこのことをもつとはっきりと強調している。それは「主として、地勢とも結びついている気候のせいだ。特に、サハラからアラビア、ペルシャ、インド、タタライを横切って最高のアジア高地にまで連なる大砂漠地帯と結びついている気候のせいだ。人工灌漑はここでは農耕の第一条件だ。そして、それは共同体か地方政府か中央政府かの仕事だ⁽⁹⁾」。

専制主義国家の物質的基礎の一つは、明らかにいわゆる給水調節の灌漑工事である。これは、個人とか小集団では旱魃とか水害の問題を解決することができないことから、集中的な権力に依存しなければならないということのためである。中国で古代文化が興った黄河流域の黄土砂漠地帯では、伝説上堯には9年の水害があり、湯には7年の旱魃があった。大禹は治水によって貢を行ったし、また商代にはしばしば水害や旱魃の災害を避けるために、「常には寧からず」、「常にはその居たらず」ということで、遷都したり、移民したりした。こういったことはすべて専制君主の重要な仕事であったことを証明している。

しかし、前に中国の中央集権専制官僚政治が形成される原因について取りあげたときに指摘したように、治水、交通および公共事業の必要性和そのことが可能となったのは、屢々集中的な専制政体が形成されてからのちだということであり、嬴秦の時代に出てきたような形態の中央集権的専制政治は、「粟を背りて而して税す」といった、地主経済の基礎がすでに大體形成されてからのちに必然的に出てくるということになるのであって、それは単に治水灌漑の要求によるものだけというのでは、十分に説明できないのである。生産力が極めて低い太古の時代には、地理的な自然条件は、社会的な生産様式の形成に対して、相対的にかなり大きな役割をもってい

(8) マルクス、手島正毅訳『資本主義的生産に先行する諸形態』（国民文庫）、大月書店、1980年、12頁。

(9) エンゲルス「エンゲルスからマルクス（在ロンドン）へ—1853年6月6日」、マルクス＝エンゲルス全集、第28巻、大月書店、1985年、213～214頁。

たというのは当然のことである。エンゲルスが取り上げている気候、土壌、特に広大な砂漠地帯では、集中的な力によって、治水、灌漑を推し進めていく要求が必要となってくるのは疑いない。しかし同様にまた、これらの自然条件あるいは自然環境からは、統一的な集中的力によって、比較的すぐれた土地とか狩猟場、牧場、あるいは農地を争奪するとか、守るとかいう要求も出てくる。いわゆる「民の利を視て遷を用う」とか、いわゆる「水草を逐うて而して居す」とかいわゆる「狄人の欲する所の者は吾土地也り」とかいったことは、すべて各々の集落とか、大氏族とか、氏族が一人のトップを戴いて、生死にかかわる土地問題を解決していかざるを得ないという所以を説明している。

エンゲルスはこのことについて、つぎのように教えている。「人口がいつそう稠密になったため、対内的にも対外的にも、いつそう緊密な結束が必要になる。親縁諸部族の同盟がどこでも必要になる。まもなくまた、それらの諸部族の融合が、またそれとともに別々になっていた部族諸領域を一つの全体的な部族団〔市民団〕領域に融合させることが、すでに必要になる。部族団の軍統帥者— *rex, basileus, thiudans* —がなくてはならない常設の公職者になる。……以前には、戦争は、侵害にたいして復讐するためか、または不足になった領域を拡大するためだけにおこなわれたのだが、いまやそれはたんなる略奪のためにおこなわれ、恒常的な生業部門となる。……略奪戦争は、最高の軍統帥者の権力をも、下級指揮者の権力をも高める。慣習的に同じ家族から後継者を選んでいたのが、とりわけ父権制が採用されて以来、しだいに世襲制へと移行する。世襲制は、はじめは大目に見られ、次には要求され、最後には篡奪される。世襲王制と世襲貴族との基礎がここにきずかれたのである。こうして、氏族制度の諸機関は、人民のなかの、氏族、胞族、部族のなかのその根をしだいに断ち切られる（傍点部は訳者改訳）」⁽¹⁰⁾。

(10) エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」、同上全集、第21巻、1984年、163～164頁。

このことはすべての社会が、階級も搾取もないという状態から、階級が生じ搾取が存在するという状態へ転化していく、一つの大きなキープポイントであり、このことは、中国社会に「アジア的生産様式」が形成される過程で、極めて重大な役割をもたらしたと言わなければならない。この歴史段階に相当する夏、商の諸王朝の記載には、各級の軍事統帥者の称号とか、いわゆる賢者を立ててこれに引き継いでもらうとかいったことから、世襲的に子弟に継承されるといったことに移行するようになったこととか、侵略や襲撃をうけたとき、族人達を率いてもとの土地を棄てて他へ移っていくとかいったことなどが載っているが、これらのことは、ほぼ様に、土地を奪い取るとか、あるいは土地を守ることとかいったことが、専制王権の発生を助長させるのに影響があったということを、証明するものである。

当然上述の転化の過程においては、また他の要因もありうる。中国の史学論壇では、すでに生産用具のことまで考慮に入れている人もある。呉大琨先生は、「資本主義社会以前における地租の3つの基本形態」という論文の中で、このことを明確にのべている。「統治者達が用具としての、あるいは武器としての青銅器を占有していたときには、必然的に専制統治の形式も現われてくる⁽¹⁾」。ここではこういった類の説明の仕方が、どれだけ取るにたるものか分析するいとまはちとないが、いささか首肯すべきところもある。それはすなわち、生産用具の発展水準が、「アジア的生産様式」における土地「王有」形態の形成の原因を説明することができなかったとしても、「アジア的生産様式」のかの初期における奴隸的制度が、なぜ古典的な奴隸制にまで発展しないで、そのために逆に初期封建制に移行していったのかについては、説明可能なからである。

「アジア的生産様式」が上述の、またその他さまざまな原因から出現したというのであれば、それはなぜギリシャ・ローマのかの古典的な奴隸形態にまで発展できなかったのか。実際には、古典的な奴隸形態にまで発展

(1) 「文史哲」、1953年第1期、30頁。

しなかった社会はずいぶんとあるが、原因は同じというわけではない。ただ「アジア的生産様式」古代中国について言えば、当時そのような発展に不利であったような地理的条件と、生産用具の発展水準という2つの要因、さらにはこの様式自体の制約を挙げれば、おそらくやほぼそのへの事情が結局どうなのかを説明できることになる。

奴隷生産形態の発展は分業・交換の発達、商品生産の発達、私有財産関係の発達を意味し、また氏族関係の根底的な解体を意味する。エンゲルスは、アテネの奴隷制国家の発生過程について、次のように示している。「文書にされるされた歴史がさかのぼるかぎりでは、土地はすでに分配されていて、私的所有に移っていた。これは、未開の高段階の終りごろにはすでに比較的発展をとげていた商品生産とそれに見合った商品取引とに照応するものである。穀物のほかに、ブドウ酒やオリーブ油がつくられた。エーゲ海の海上貿易は、しだいにフェニキア人の手から奪われて、大部分アッティケ人の手にはいつつあった。所有地が売買された結果、また農耕と、手工業、商業、航海との分業がすすんだ結果、じきにさまざまな氏族、胞族、部族の所属者たちが必然的にいりまじるようになった」（傍点部分訳者改訳⁽¹²⁾）。「農耕、手工業、さらに手工業のなかの無数の職種、商業、航海業など、さまざまな生産部門のあいだの分業はますます完全な発展をとげていた。いまでは住民は、職業別にかなり固定した集団に分かれ、それらの集団はそれぞれ多くの新しい共通利害をもっていた。氏族または胞族にはこれらの利害をいれる余地はなく、したがってその世話をするために新しい公職が必要になった。奴隷の数はいちじるしくふえており、このころにはすでに自由なアテナイ人の数をはるかに凌駕していたにちがいない」（傍点部分訳者改訳⁽¹³⁾）。

これまで引用してきた「古典古代」の奴隷制発達の史実からすると、「アジア的生産様式」の社会において、なぜ奴隷制生産関係が発達してこなか

(12) 前掲書、前掲全集、111頁。

(13) 同上書、同上全集、115頁。

ったのかの根本的原因の反証を引き出すことができる。周代以前のある程度あてにできるような文献とか伝説には、商業について触れているものは極めて少なく、出土物にしても、商業が行われた交換手段あるいは貨幣商品が出てくるというケースは稀である。西周にまで来るにおよんではじめて「詩経」に、「布を絹と交換する」（衛風氓）、「賈用して售らず」（谷風）、「君子に見えるに、我に百朋を錫う」（小雅菁菁者莪）などが載っており、これらのことは当時ある程度原始的な交易関係があったことを、暗に示している。商品貨幣関係がこのように発達しなかった理由は、先ず社会の労働生産力が極めて低いという点から説明されるというのは当然である。広い砂漠地帯の黄土地区で、極端に幼稚な技術条件では、明らかに労働生産力の引き上げは特に大きな制約を受けざるを得まい。このことは生産用具の水準の低さとも密接に関連している。

当時の生産用具を出土物から出てくる資料に依ってみると、それらはせいぜい青銅に限られ、それが青銅を使った農器具であったかどうか、かなり疑わしい。土地条件がすでにのべたような状況で、生産用具の水準もこういった状態であれば、当時の農業の労働生産力がどれだけの剰余生産物を出し、それが商品として流通関係をどのように発展せしめたかといっても、それほど大きな可能性はなかったであろう。また、当時の夏商といった諸政治勢力の及ぶ範囲の山西、河南、河北などの諸省の自然的な地理的環境のことを考えあわせると、それは古代のギリシャ・ローマが位置していた地中海東部、すなわちヨーロッパ、アジア、アフリカの3つの大陸が角を接する地域と比べて、明らかに商業および海運業の発展には不利であった。商業は生産の基礎の上に生ずるものであるが、商品流通の自然環境や外部的な交換関係が便利である方が、屢々生産の発展を誘発し、それによってまた商業も発展する。この2つの面で中国には及ばない点があり、さらに、「アジア的生産様式」における農工結合体の自給性という特徴および族姓関係の拘束がこれに具体的に加わると、比較するとそれほど低いというわけでもない生産様式も、古典的な奴隷制の形態に容易に発展する

というわけにいかなくなる。

それでは、「アジア的生産様式」というのは、そこでずっと固定的に停滞しているのか？事実によって、すでにそうではないということが証明されている。一つの社会がもとのままにとどまって、不変であるということはあるえない。例えば、よく起こる部族間の戦争は、必ずや集落の首長とか、諸部族が共同して保護を受けている専制君主の所属集団、および集団のメンバーに対する関係に影響を与える。あるいはまた、君主が自分の下に所属する集落の大氏族に対して行う権力と要求、あるいは集落の大氏族の家族の首長がその構成メンバーに対して行う権力と要求が、ますます大きくなっていくにつれて、すなわち搾取関係がますますはっきりとしてきて、ますます厳しいものになってくると、家父長制はこのような変遷の過程において、漸次家内奴隷の形態をとってくるようになる。

さらに一度戦争があれば、捕虜や戦利品が必ず出てくる。征服され、捕虜となった異部族のメンバーに対して、当然彼等を部族内のメンバーと同様に取り扱うことはできない。ここではまだ商業とか、高利貸はよく発達していない。したがって、個人の財産権も発生していないというような原始的な社会条件の下にあっては、奴隷発生的重要な要因は種族的なものだけということになるのだが、反対にこのために明らかに部族、氏族内部の階級分化の可能性が出てくることになる。しかし、単純な掠奪戦争によって生じてきた社会的生産関係の変化と、分業が発達し、生産技術の改造・進歩がすすみ、商品交換関係が発展するということによって引き起こされた変化とを比べると、この間の差異はきわめて大きい。前者は氏族的紐帯に対応するものである。ここでは屢々団結して闘うためにとか、掠奪にあったとき保護を求めるためにとか、専制君主の統率にも便利なようにとかいったことのために、氏族的紐帯は分解や弛緩するということはないで、むしろある程度強固にされてきた。当然家父長制が形成されるとか、氏族、大氏族の上層分子の特殊化あるいは貴族化現象が出てくるとか、さらには捕虜にされた異族分子が奴隷として使用されるようになるとかいっ

たことは、もとの族姓関係の中に変化を生じてこさせざるを得なかった。しかし、社会的労働生産力の著しい発展はなかったから、このような変化は結局限られたものだった。さらに血統の紐帯が概ねぴっちり結びついているような状況の下にあつては、農業と工業とが一体となった特徴的な村の組織を形づくっており、族姓関係がこの支柱とならざるを得なかった。農業と工業が結合した村落組織と族姓関係は、相互に緊密に結びつくという作用をもっており、これらはすべて専制主義の基礎となっているということを、明らかに示している。

概括的に言うと、殷商末期までずっと、社会的な労働生産性は極めて低く、農業と工業の結合した自給の生産は、個人の私有財産制を発生させなかった。家族、氏族、大氏族の集落が土地財産の領有者であつただけでなく、また、異族の捕虜を奴隷にする主宰者でもあつた。しかし、経済的には進歩は緩慢で、結局もとの自然的集団が経済的活動を束縛するということになった。これが一つの側面である。同時に、農業と工業の結合体の基礎の上で不断に再生産を打ち立て、さらに戦闘上の頻繁な任務がこれに加わると、専制君主の下に所属する集団組織の専制君主に対する政治的隷属関係の強化、あるいは専制君主の所属集団組織に対する経済的要求が大きくなるといったことが、十二分に生じうる。このような政治経済関係の変化は、明らかに君主の権勢を集中的に表現する国家形式をさらに一步前進させたものでなければならない。かくてマルクスが提示したかの機構、すなわち、「アジアでは、一般に、太古以来、3つの政府部門しかなかった。財務省すなわち国内略奪省、軍事省すなわち国外略奪省、最後に公共事業省である。」⁽¹⁴⁾ という、かの機構となるというわけである。

最後の機構は、君主のために宮殿とか城壁とか濠を建造するほかに、君主の収入と直接関連する水利事業を行うものである。君主国家はこのような範囲にわたるものであり、これに臣属する「百姓」、あるいは部族、

(14) マルクス「イギリスのインド支配」、同上全集、第9巻、大月書店 1962年、123頁。

氏族の代表者、あるいは家族の家長も、それなりのものとして、その集団の構成メンバーに対して権力を強めていった。家内奴隷制もすでに萌芽がみられ、さらに異族の奴隷も発生してきた。そして遂に、原始社会から引き継いできた「民主」と「自由」は、さらに制約をうけることが多くなってきた。尚書湯誥およびこの後の盤庚が「百姓」に対して発佈した告示は、商代の社会統治にはすでに顔とか威光とかいったことがかなりあったことを、十分に示唆している。

これまでのところで述べてきたように、中国の地主経済封建制は、政治的には中央集権的専制主義となって現われ、経済的には土地は一定の範囲で自由に売買されうるし、直接生産者一農奴は一定の範囲内で自由に移動しうるものとして現われた。しかし、農業と工業が結びついた村落組織と族姓関係は、依然として経済社会の基礎となっていたのである。こういった形式と構成の要素は、明らかに「アジア的生産様式」の諸特徴と一定の関係をもっている。おそらくやこのことが、マルクス、エンゲルスもアジア的形態を、屢々中国の封建社会の段階の政権の経済的基礎、また商業・高利貸・貨幣等々の経済的基礎として指摘する所以でもあろう。しかし、留意すべきは、彼等の立論は、これを真の「アジア的生産様式」の転化形態、あるいはその残滓として理解するということである。

今進んで考察すべきは、このような生産様式がどのようにして西周の封建社会で推移してきたかである。しかるのちにまた、これが領主経済の封建制から地主経済の封建制に転化していく過程で、どのように決定的役割を果たしたかを研究しなければならないということになる。